

高校生の進路選択を考える

第5回

このコーナーでは、大学教育や高校教育、そして大学入学者選抜が変わっていく中で、高校生の進路選択は、高校での進路指導はどのように変わっていくのか、考えていく。

今回は、「創造社会を支える方法・道具をつくる」ことをめざした研究を行っており、「パターン・ランゲージ」の開発に取り組む、慶應義塾大学総合政策学部の井庭崇准教授にインタビューした。パターン・ランゲージとは、「どのような状況で、どのような問題が生じ、それを解決するにはどうすればよいか」という「状況」「問題」「解決」をセットにして記述する知識記述・共有の方法である。それまで個々人

の感覚として埋め込まれていた実践知を、広く人々で共有することをめざしたものである。

進路選択には、例えば「自分の適性がわからない」「将来やりたいことがわからない」「やりたいことが実現できる進路がわからない」など、多くの高校生が共通に抱える悩みがある。そこで河合塾では、井庭研究室および株式会社クリエイティブシフトと共同で、そうした状況に直面したときに、どのようなことを考え、どのような行動をすると良いか、高校生に参考にしてもらうためのパターン・ランゲージを開発した。

今回のインタビューでは、開発にあたっての議論を踏まえてお話しいただいた。

CONTENTS

慶應義塾大学総合政策学部

井庭 崇 准教授 p47

進路選択とは自分の生き方をつくること

大学や職業は、生き方を実践する場

- ▶ 進路選択は自分の生き方を作ることであり、単に大学・職業を選ぶことではない
- ▶ 自分の好きなことや経験を振り返り、自分の価値観を見つめる
- ▶ 実際の体験や人との対話によって、考えを整理する
- ▶ やりたいことができそうな学部・学科を「領域」として捉え、それをめざしていく
- ▶ 自分のやる気が出るポイントを知り、高め合える仲間と頑張り抜く

進路選択とは自分の生き方をつくること 大学や職業は、生き方を実践する場

慶應義塾大学総合政策学部 井庭 崇 准教授



好きなことや経験を掘り下げ 自分の価値観を見つめる

——高校生が進路を選択する際に大切なことは何でしょうか。

高校生が進路を選択するというと、「大学を選ぶ」「学部・学科を選ぶ」というように、行き先を選ぶという感覚になりがちです。しかし、進路選択の根本は自分のこれからの生き方を考えることであり、その生き方を実現できる場所を考えることだと思います。

その際、「自分の生き方をつくっていく」という考え方を持つとよいでしょう。将来就きたい職業から学部・学科をイメージするのもひとつの方法ですが、高校生の段階で何十年も先のことを予測することはとても難しいことですし、自分もこれから成長し、変化します。さらに、これだけ変化が激しい時代においては、将来その職業があるかどうかもわかりません。新しい職業が登場するかもしれませんし、自分が新しい職業をつくることになるかもしれません。もはや、既存のものから選ぶという視点だけで進路を考える時代ではなくなりました。自分がどんなふうに住きたいかということを考えた上で、自分なりの生き方を形づくっていくことが大切なのです。

高度経済成長期の頃までは、皆が使っている参考書で勉強して、良い大学に入って、大企業に就職するといったわかりやすい成功モデルがありました。現在はそうした価値観

はますます通用しにくくなってきています。生き方も、そこに至る道も多様化するなかで、1人ひとりごとのように生きていくのかを自分なりにつくっていくことが求められているのです。

そのためには、さまざまな視点から「自分を知る」ことと、大学や社会といった「外の世界に触れる」ことを繰り返すなかで、自分のやりたいことや、そのために何をすべきかを考えていくとよいでしょう。また、それは、大学進学や就職の時だけに考えるのではなく、その時々、自分でベストだと思う考えを深めることが重要です。

——生き方を考えるとき、まずは何を手がかりにすればよいでしょうか。

生き方を考えるというと大仰なことのように聞こえますが、身構える必要はないと思います。まず、自分は何が好きなのかを、しっかりつかんでおくことです。そして、なぜ好きなのかという理由を掘り下げて考えて、ただ「好き」ということを超えた意味や自分なりの価値を見出していきます。実際、私が自分の進路を考える際に、映画や映像が好きというところから、単に「好き」ととどまることなく、そのどこに自分が魅力を感じているかを考えていきました（詳細は後述）。

また、経験を振り返ることも大切です。その際、地域で活動した、スポーツや音楽に打ち込んだなど、単に活動の記録にとどめるのではなく、自分にとっての意味を見出すことが

大切です。それは自分にとってどのような経験だったのか、そこから何を学んだのか、それは将来も取り組んでいきたいと思えたのかどうか、あるいは、そこで出会った人や出来事から別の課題や方向性が見えてきたのかなど、その経験が自分にとってどのような気づきや影響をもたらしたのかを考えます。

今の自分にとっての意味だけでなく、未来の自分にとってどのような意味が見出せそうかを考えると、振り返りはより充実します。同じ経験でも、大学でこの学問を学ぶとしたらあの経験はどう生きてくるだろうかとか、この仕事に就いたらあの経験はどう生きてくるだろうかなど、進みたい方向性・興味との組み合わせによって何度も振り返ると、その都度、違った側面が見えてきます。

興味がある世界を体験したり 周囲の人や外の世界と 対話しながら考える

——他にも、自分の生き方を考えるために、高校生ができることはありますか。

私が学生によく言うのは、興味のあること、将来やりたいことを実際にやってみるということです。例えば、将来「物書き」や「ライター」になりたいという人には、「いま何か書いているの？」と尋ねます。すると、「将来なりたいと思ってはいますが、まだ特に書いたりはしていません」という答えが返ってくる場合があります。そういうときに、今から

書くことに取り組んでみることを勧められています。本当に書く力があるのかや本当に書くことが好きなのかは、実際に書いてみないとわかりませんよね。将来なりたいと思っても、ただ漠然と憧れているだけではそこに近づくことは難しいでしょう。もちろん、本格的にやるのは今後その道に進んでからかもしれませんが、少しでも今の自分でできることから始めてみるのです。

ただ待っていてもチャンスというものはやって来ないものですし、たとえ運良く機会が到来したとしても、そこで初めてやってみるというのは、そのチャンスを活かすことはできないでしょう。そこで、趣味でもアルバイトでも校内の活動でもよいので、実際にやってみて、「やっぱりこれが好きだ」とか「得意だ」などと感じることが重要です。

また、自分の生き方を考えるときに、自分の中を掘り下げていくばかりでは、行き詰まって苦しくなってしまう。自分の中を突き詰めていっても、強固な何かに行き当たるわけではないからです。そういう何かがあると思ってしまうがちですが、そうではありません。あるのは、あくまでも、ふわっとした可能性の雲のようなものです。だから、周りや世の中のいろいろなものに触れることで、自分の心が動くことを探してみたり、オープンキャンパスに行ったり興味ある研究分野に触れてみたりして、そのときの気持ちの動きを知ることで、自分のことがよく見えてきます。そうやって自分についての理解を深めていくのです。

もうひとつ、友達でも先生でも親でもよいので、人と話すことも自分を見つめるのに有効です。話すことで、自分が当然だと思っていたことが他の人にとってはそうでないとかわかったり、自分の特徴が見えてきた

ります。相手の話を聞くことによって、新しい視点を得ることもできます。誰かと直接話すだけでなく、著名人のエッセイや自伝のようなものを読むのも、ひとつの対話と言ってよいでしょう。

自分の生き方といっても、世界で唯一の「オンリーワン」の何かを見つけるという必要はありません。他の人との差異化ではなく、自分なりに自分のあり方をつくっていけばいいのです。そのためには、参考になる考え方は、どんどん取り込みましょう。私は、心にとまったことがあったら、簡単なメモをとっています。スケッチする、本に付箋を貼るなど、自分に合う手段なら何でもよいのですが、実際の経験や人との対話を通して、自分の気持ちがどういう状態か、どう変化したかを把握することが、自分を見つめることにつながります。

もしかしたら、自分で決めた生き方や進路について周囲の人に反対されることもあるかもしれません。そういうときには、その人の話や意見をよく聞いて理解した上で、それでもどうしても自分の考える方向がよいと思ったら、それをしっかり伝えてみましょう。その内容や情熱で、理解してもらえるかもしれません。しかも、他の人に対して説得的になるように考えをまとめることで、意義や計画について考えを振り返ることにもつながります。

——高校生の時に考えた「生き方」は、簡単に変わってしまうような気がします。

もちろん大学に入れば、高校までに触れなかったことや、より広い世界に出会うことになるので、やりたいことは変わって当然ですし、むしろどんどんアップデートしていったほしいと思います。とはいえ、まずは「これをやりたいんだ」といった

ん決めてみることが重要です。

私自身、25年ほど前、慶應義塾大学の環境情報学部に入試で合格したのですが、その時は、映画や映像に興味があり、衛星放送を使って「世界放送」をしたいと思っていました。ところが大学では、当時登場したばかりのインターネットに出会い、「こんな技術があるのか！」と衝撃を受けました。そもそも映像や衛星放送への興味がなければ、インターネットと出会っても衝撃は受けなかったと思います。その意味で、最終的にそれをやらなかったとしても、最初に「これだ！」と決めていたことは無駄ではなく、大きな意味をもったと言えます。

その後、大学で学ぶうちに、自分がやりたいのは、映画をつくるということではなく、世の中に新しい視点をもたらすということだとわかってきました。そして仕事を考えたときに、必ずしも映像の世界でなくてもよいと気づきました。

学部・学科を超えた「領域」として進路を捉えると選択肢は絶えず生まれてくる

——自分の生き方について考えたことを踏まえて、どのように大学や学部・学科を選べばよいでしょうか。

大学の魅力は、一般的に大学選いで重視されている、大学の知名度や偏差値にも反映されているとは思いますが、それを一旦横に置いて、本当に自分はそこに行きたいのか、そこに進んだ自分がいきいきとしているかどうか、大変だけれど頑張っているイメージを持てるかどうかを考えてみてください。

その上で「人工知能の開発に携わりたい」とか「この先生の下で学びたい」と目標が明確にある場合は、その大学、学部・学科をめざせばよいでしょう。

しかし「人を幸せにする生き方をしたい」というような場合には、それに直接対応する学部・学科があるわけではありません。そこで、「人を幸せにする」という目標が実現できそうな進路を、「領域」として捉えてみましょう。やりたいことができそうな場をすべて可能性として捉えるようなイメージです。「身近な幸せをつくりたい」なら、家政学系で日々の食事について研究することもよいでしょうし、デザイン系で居心地の良い空間をつくることもできます。その領域のなかで、自分はどのような力を発揮できるかを考えてみます。

進路というのは、大学も就職も、どんなに熱い思いを持っていても、定員や相手先の意向などがあるため、自分の希望が叶わないことがあります。しかしそれで夢が潰れるわけではなく、進みたい方向性を領域として捉えることで、別の手段、別の場所で輝く道を模索することができます。一点集中で「ここ」と決めてしまうよりも、柔軟で適応的な考え方がよいと思いませんか。

そもそも、進路選択は、敷かれたレールの上を走っていくのではなく、目標に向かって、その都度適切な経路や乗り物を選んでいくイメージです。この方向だと決めて進んでいって、実はこっちだったと気づいて方向修正をするというように、行き先や行き方は途中で変わっていきますし、人それぞれです。自分の進路の選択肢をつくることができると捉えられないでしょうか。

——選ぶことはワクワクすることだということを、高校生にはどのように伝えられるでしょうか。

それは、「あるものから選ぶ」のではなく、自分なりに「つくっていく」のだと捉えるということではないでしょうか。とてもクリエイティブな

ことです。

高校3年生になったので受験する大学を決める、というように、特定の時期が来たのでいきなりどこかを選択しなければならなくなると、苦しいと感じるのは当然です。

しかし、高校生は部活動を選んだり、アルバイトを選んだり、他にも高校生活をより豊かにしたり、楽しんだりするために、これまでもさまざまな選択をしているはずで、そしてその結果、自分らしさや自分の生き方が形づくられてきました。進路選択も、その日々の「自分を形づくっている」ことの延長線上にあると捉えるとよいでしょう。

その上で、行くことができそうな大学から進学先を選ぶのではなく、自分らしい生き方を実現できる場所はどこか、という視点で選択できるとよいのではないかと思います。

やる気が出るポイントを知り 高め合える仲間と頑張り抜く

——大学に進学する場合は入試を乗り越えなければなりません、どのように頑張ればよいでしょうか。

進みたい道に熱い思いを持っていても、気持ちがくじけることはあります。それを乗り越えて勉強するためには、やる気が出るポイントを自分で知ることです。「図書館で勉強するとはかどる」など、それはひとつでもよいですが、複数あると強みになります。また、受験勉強はどうしても弱い自分との戦いになってしまいがちなので、高め合える仲間と一緒に頑張り抜いてほしいと思います。より集中して頑張らなければならぬときには、自分を応援してくれたり支えてくれたりする人のことを考えるのも、大きな底力になります。

進路を考えると、先のこと意識がいついってしまいがちですが、人生は「今」の連続ですので、今しかできな

いことに打ち込むなど、現在と未来のバランスを考えることも大切だと思います。

——高校の先生に、進路指導をする上でのアドバイスはありますか。

私自身は、学生に、自分の経験や知識をもとに、自分が良いと思うこと、信じていることを熱く語ります。それは、一般論として話すと、自分からどんどん離れていってしまう感覚がありますし、相手にも響かないと思うからです。自分が経験してきたこと、考えていること、信じていることを、ストレートにしっかりと伝えることを大切にしています。

ただし、「これについては詳しいけれど、こちらはあまりよくわからない」ということや、「私なりのひとつの見方にすぎない」こともきちんと伝えます。その学生が私1人の意見に影響され過ぎだとか、私の意見が参考にならないと感じた場合には、その学生にとって参考になりそうな別の人を紹介したりもします。

大人になったときに印象に残っているのは、自分の生き方について熱く語っていた先生ではありませんか？自分の生き方について真剣に考えている大人に触れる機会を、もっと生徒・学生たちに提供できるとよいなあと考えています。

最後に、社会のなかで生きていくということは、自分が何かを選ぶだけでなく、自分が選ばれるということでもあり、その関係のなかで起きる出来事の連続です。自分の生き方を考えてそこに向かって頑張りながら、それだけに囚われず、相性やタイミングなども受け入れつつ、どのように生きていくかを模索していくことです。高校生には、人生とははずっとつくり続けていくものだというつもりで、その時々で真剣に考え、自分の人生を生きていってほしいと思います。